仮名草子章題一覧稿 ―標題に関する問題提起として―

入口 敦志

《一》

「仮名草子章題一覧」とは、仮名草子類の章題を集めた〈仮名草子総目次〉とも呼ぶべきものである。現在形成作業中であるが、その過程で出てきた標題に関する種々の問題点を報告する。

後掲の表はその一部である。『きのふはけふの物語』以下咄本を中心とした仮名草子や西鶴作品の一部などを掲げ、およそ成立・出版の年代順に配列した。

笑話集を例に掲げたのは、小さな咄の集積であるために、完結した一話づつに標題を付しているかどうか、またどのような標題を付しているのかなどが比較的把握しやすいと考えたためである。例えば仮名草子の代表作である『竹斎』や『恨の介』などには、全体の標題はあるが、作品中には章題がないため、章題の問題を考えるには適当ではない。

冒頭二つの作品、『笑府』と『十訓抄』は、中国の笑話集と日本の説話における章題の例として掲げておいた。掲出した項目は上から順に「作品名」「作者」「和暦」「巻」「章」「標題等」の六項目。

《二》

ここに掲出した表でおよそ一七世紀の百年間を概観できる。

この百年間は、古活字本に始まる出版活動が盛んになった時代で、その後整版本の時代に入り商売としての旺盛な出版活動が定着してゆく百年間でもある。

写本でもそうであるが、レイアウトそのものにも多くの情報が含まれていることは言うまでもない。特にコンピュータを使用してテキストファイル化するにあたって、各種の情報をタグ化する場合に、字下げ・改段・改行のようなレイアウトに関する情報、また圏点・鉤点などの強調表現や傍書・傍訓・頭書・脚注・割書などの注の情報はタグ化するのに難しいものである。見方を変えれば、レイアウトなどにも本文のテキストの文字列に劣らない多大な情報が含まれていると言うことでもある。古活字本から整版本への移行には様々な理由が挙げられているが、こういったレイアウト・強調表現・注などの表現が写本同様自由にできるといったこともその理由の一つにあげられるであろう。古活字本の中にも、例えば嵯峨本の謡本のように本文の脇にゴマ譜を付したものもあるにはあるが、それは極く少数であって大半は本文だけの提供にとどまっている。

標題の問題もレイアウトや強調表現と関わってくるため、「仮名草子章題一覧」の作成にあたっては、レイアウト情報や使用文字種・記号等を詳細に調査した表も同時に作成しているが、本報告では標題そのものの問題に焦点を当て

るため省略した。

《三》

標題の付け方という点からみて、この表には様々な型が現れている。次に整理してみる。

①各話の標題も分類もない

『きのふはけふの物語』など。

②分類はするが各話の標題はない

『寒川入道筆記』や『醒睡笑』がこれにあたる。『戯言養気集』もこれにあたるかと考えられるが、分類なのか咄の標題なのか不分明なところもあり、過渡的なものととらえるべきか。また、咄ではなく物は尽くしの形態をとる『犬枕』などもこれに入る。参考にあげた『十訓抄』や中国の『笑府』などもここに入る。『十訓抄』は題名通り、「不侮人倫事」など十種類の教訓をたて、それに従って咄を配す。『笑府』は各巻に「日用部」などの部をたて、その主題に沿った咄を集めている。『笑府』は『醒睡笑』などと同時代の成立であり、影響関係の有無等考えなければならないことは多い。また、中国での先行する笑話集との関係もあり、別に考察の機会を設けたい。

③分類も各話の標題もある。

ここには該当するものがない。『今昔物語集』などがこれにあたる。まず「天竺」「震旦」「本朝」と大きく地域によって分け、さらにそれぞれに「付」として、「仏法」「宿報」「世俗」などの下位の分類を行い、各話にもそれぞれ「・・・・話」といった標題が付されている。

④各話の標題はあるが分類はしていない。

『理屈物語』『一休はなし』『竹斎はなし』等多数。これらの作品では分類はしていないものの、例えば『一休はなし』であれば一休という一人の人物に関わる咄を集めたものであり、作品そのものが大きな分類の結果生み出されたものと考えることができる。こうした傾向は『竹斎はなし』や『杉楊枝』など後継作にも受け継がれていく。

⑤一話に二つの標題をもつ。

『好色一代男』『好色一代女』等西鶴作品がこれにあたる。以後浮世草子にこの型が受け継がれていく。

《四》

また、標題そのものにも特徴があることもわかる。「・・・・事」という標題とそれ以外とに大きく分けることができるように思われるのが特徴の一つである。ここでは便宜的に「・・・・事」という形式を〈事書〉と、それ以外を〈非事書〉と呼ぶこととする。先に触れた『今昔物語集』は事書の例である。

『戯言養気集』では、「ちごの事」「もちよく身をせむる事」など〈事書〉系の標題もあるが、同時に「善悪出入のいさかひ」「あふむかへしのすねこと」など〈非事書〉系の標題を持つはなしもある。また「・・・・部」や「・・・・物」など部立のような標題もあって、各種の標題が入り交じっている。その標題も分類を示すのか一話の標題を示すのか不分明な点もあり、この点でも混乱した印象を与える。様々な試みの過渡的な様相を示しているようにも思われる。

それ以外では、一作の中で〈事書〉〈非事書〉両系列が混じることは希であろう。そういう中で注目されるのはやはり西鶴の作品である。『好色一代男』では、「けした所が恋のはじめ」という〈非事書〉の標題と「こしもとに心ある事」と

いう〈事書〉の標題との両方がひとつの咄に付けられており、その形式で全巻を通している。さらに次の『好色一代女』になると〈舞曲遊興〉といった中国の小説風の漢字のみの標題に、「清水のはつ桜に一ふしのやさきし娘いか成人のゆかりぞ親は〳〵あれをしらずや祇園町のそれ今でも自由になるもの」といった〈非事書〉系の、と言うよりも内容の要約と言ってよいような長大な標題を組み合わせており、題名の点においても相当の工夫を示している。標題だけを取り出しても、西鶴作品はそれ以前の作品とは一線を画すものと言えよう。

《五》

〈事書〉系と〈非事書〉系の標題は、内容に関わる問題をはらんでいると予想される。

例えば軍記物語の標題をざっとみてみると、『保元物語』『平治物語』には標題はなく、『平家物語』には、〈事書〉系の標題を持つものと〈非事書〉系の標題を持つものとの二つの系統の本がある。『義経記』は〈事書〉系、『曽我物語』は標題なし。『太平記』『太閤記』『信長公記』は〈事書〉系。これらは手近な本によって粗々見ただけのものであるが、これだけでも幾つかの問題が指摘できる。あくまで作業仮説としてではあるが、例えば、「‥‥物語」という題名の書物では〈非事書〉系の標題をとり、「‥‥記」という題名の書物では〈事書〉系の標題をとる傾向があるのではないか、というようなことである。更に、〈事書〉と〈非事書〉との間には、事実と虚構という大きな問題さえ含まれているようにも考えられるのである。先ほどの作業仮説を言い換えると、「‥‥物語」系は内容が虚構の方に傾き、「‥‥記」系は内容が事実の方に傾いていると言うことなのである。問題はそんなに単純なことではないのであろうが、作業として〈事書〉と〈非事書〉との分別の調査を文学史全般、また歴史書全般に及ぼす必要があるであろう。また、特に文学作品においては、標題を誰がいつ付けたのかと言うことも大きな問題になってくる。標題を付けた時点での作品に対する解釈が、〈事書〉か〈非事書〉かを選ばせたとも言えるからである。その点から見て、『平家物語』に二系列が併存していることなど、かなり興味深いことではある。

《六》

大きなはなしはおくとして、ここで扱っている一七世紀の作品においてはどうであろうか。

『かなめいし』は咄の本ともとられているが、内容は寛文二年五月一日に実際に京都に起こった地震を扱ったルポルタージュともいえるものであり、事実と言うことを強調する〈事書〉標題を持つこともうなずける。『理屈物語』は各話すべてに中国の故事を指摘するもので、やはり中国の歴史上の事実を扱ったという意味で〈事書〉標題を付しているともとれよう。『一休はなし』『一休関東咄』『一休諸国物語』という一休を主人公とする作品がすべて〈事書〉標題を持つことも、咄の虚実当否は別として、一休という実在の人物の事跡として構想していることから意味づけることができるだろう。それに平行するように竹斎を主人公とする『竹斎はなし』がやはり〈事書〉標題を持つことも同様の理由によるのではないか。ところがその両者が共に活躍するという設定の『杉楊枝』では〈非事書〉標題をとるというのも大変興味深いところである。一休も竹斎もそれぞれ実在の人物に比定されるが、それぞれの生きた時代は全く異なっており、当然二人が一緒にいるなどと言うことは事実ではあり得ない。そういう虚構の設定を取り入れた『杉楊枝』の作者は、事実としての〈事書〉標題をとるこ

とをためらったのではないだろうか。

《七》

以上、作業途中の表から思いついたことを並べてみた。何度も繰り返しているが、標題を〈事書〉系と〈非事書〉系に分けてみるなど、あくまで作業上の仮説ではあるのだが、やはり詳細な検討を要する問題であると考える。現在の構想は浮世草子を射程に入れた「仮名草子章題一覧」だが、文学史全体を見渡す視点も必要であろう。問題提起と今後の課題として、報告を終わりたい。

《八》資料

〔仮名草子章題一覧（稿）〕

作品名〔作者〕	和暦（西暦）	巻	章	標題等
笑府〔馮夢竜撰〕		巻一	序	
				古艶部（富貴）
		巻二		腐流部（腐儒）
		巻三		世諱部（貧賤）
		巻四		方術部（医者易者）
		巻五		広萃部（僧侶道士）
		巻六		殊稟部（奇人奇癖）
		巻七		細娯部（娯楽遊興）

作品名〔作者〕	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（笑府）〔馮夢竜撰〕		巻八		刺俗部（俗物根性）
		巻九		閨風部（男と女）
		巻十		形体部（容貌身体）
		巻十一		謬誤部（間違い）
		巻十二		日用部（衣食）
		巻十三		閨語部（その他）
十訓抄〔未詳〕		上	目録	
			序	
			第一	可施人恵事
			第二	可離驕慢事
			第三	不侮人倫事
			第四	可誠人上事
		中	第五	可撰朋友事
			第六	可存忠直事
			第七	可専思慮事
		下	第八	可堪忍于諸事事
			第九	可停懇望事
			第十	可庶幾才芸事
きのふはけふの物語〔未詳〕	—	上		
		下		
戯言養気集〔未詳〕	—	上	○	しんぼちいの故事
			○	柳はみどりの故事

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（戯言養気集）［未詳］	（一）	（上）	○	善悪出入のいさかひ
			○	ちごの事
			○	もちよく身をせむる事
			○	大小のちご利どんの事
			○	うたの事
			○	（ちご法師よりあひ…）
			○	（又ある時でんがくあり。…）
			○	（山寺の下ほうし、…）
			○	（おちごさま、…）
			○	（山寺にての事なるに、…）
			○	（不動院のお児、…）
			○	（ある時、ひえの山の小ぼうし、…）
			○	（人によりことばなんどをば、…）
			○	（下京辺に…）
			○	（又さるわかしう、…）
			○	（かうやひじり、…）
			○	（上京の扇やの何とやらん云人、…）
			○	（お長と云わかしうに、…）
			○	（ある人、よきわかしうを見て、…）
			○	（小児さま、…）
			○	（世中おもてうらなる事有。…）
			○	知てしらずがほする分

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（戯言養気集）［未詳］	（一）	（上）	○	（一条辺に、よき若衆有。…）
			○	（小児、ねんじやの弁殿へ、…）
			○	物いまひの部
			○	（清水寺に住老僧、…）
			○	（大かたならず子をおもふ人ありけるが、…）
			○	にくていなる部
			○	（いなかの連歌しより、…）
			○	（古道三二渓、…）
			○	つよく古風になつんて恥を取部
			○	（信濃国ふかしと云所にて…）
			○	（丹波の奥ごほりより…）
			○	（昨日日吉が能に、…）
			○	知ざるをとはずして、めんぼくをうしなふ事
			○	悪をなせば自然にあらはるゝ部
			○	（福人のだんな寺へ参、…）
			○	（こゝにしゆせう第一なる上人…）
			○	耳にかへてうどんくふたる事
			○	まつだけを年をへて松になる故事
			○	りんきの部
			○	（五六万石ほどだいくはんせし人…）

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（戯言養気集）［未詳］	（一）	（下）	○	大かたかへてよからん物
			○	（世をわたるかんようは…）
			○	其物に付てその心あらされは似たる事を聞たかう事
			○	（ぬし屋の盛阿弥所へ、…）
			○	（秀次公の御父武蔵守殿、…）
			○	みしかき部
			○	平宗盛の卿は、いつはり人にてあつた故事
			○	久蔵主か故事
			○	あふむかへしのすねこと
			○	分別たてをして、かへつて愚なる事
			○	めつらき望（し脱カ）
			○	しぬて自慢をすれは、はなをはしかるゝ事
			○	（西国よりひんほつに上りぬる僧、…）
			○	おろかなる人の自慢は少しもゆるされもあるかの事
			○	門出をいはうの部
			○	（武田信玄、伊豆国はつかうのきたふ連歌の発句…）
			○	翠竹道三、福の神ひんほうのかみの十子、ならひに、まこ彦等に付給ふ名
			○	ひんほうの神

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（戯言養気集）［未詳］	（一）	（下）	○	信長公武家の福神
			○	同武家貧ほうのかみ
			○	（はちや出羽守と云し人は、…）
			○	（ある人、長尾謙信へ…）
			○	狂歌
			○	あはれなる事
			○	辞世
			○	耳をとらへて、はなをかむ類
			○	（よき比のうつけおもふやうは、…）
			○	（なりふりにも似すして、…）
			○	検地わひことの事
			○	前関白秀吉公御検地帳
			○	朝鮮国御進発之人数帳
			○	人心之論
寒川入道筆記［未詳］	慶長十八年成（1613）		一	歌連歌同詩聯句之事
			二	伊勢物語之事
			三	千句法度
			四	愚痴文盲者口状之事
			五	落書附誹諧之事
			六	謎詰之事
犬枕井狂哥［未詳］	慶長頃刊（1596～1615）	—	○	うれしき物
			○	かなしき物

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（犬枕并狂哥）［未詳］	（慶長頃刊）1596～1615	（一）	○	したひ物
			○	いやなる物
			○	見たき物
			○	見くるしき物
			○	つまる物
			○	すぐれて、いらぬ物
			○	なりさうで、ならぬ物
			○	なりさうもなふて、成物
			○	はなしに、しまぬ物
			○	はなしに、しむ物
			○	いらぬやうて、入物
			○	いりさうて、いらぬ物
			○	こゝろ、わくつく物
			○	わるかたきなる物
			○	よいかたきなる物
			○	身のけたちの、する物
			○	あぶなき物
			○	おそろしき物
			○	人に、あなつらるゝ物
			○	おもしろき物
			○	にくき物
			○	ありかたく忝物

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（犬枕并狂哥）［未詳］	（慶長頃刊）1596～1615	（一）	○	はらのたつ物
			○	きたなき物
			○	きれいなる物
			○	いたき物
			○	かしらの、いたき物
			○	むねの、いたき物
			○	くたひるゝ物
			○	とめたき物
			○	いなせたき物
			○	きくに、いやな物
			○	といたき物
			○	きつかひして、うれしき物
			○	さつとすむ物
			○	ての、うたるゝ物
			○	はつかしき物
			○	むつかしきもの
			○	しりたき物
			○	しりて、いらぬ物
			○	さびきし物
			○	つれ〳〵、なくさむる物
			○	わたはらいたき物
			○	あさましき物

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（犬枕并狂哥）［未詳］	（慶長頃刊）1596〜1615	（一）	○	いひにくき物
			○	わひしけに見ゆる物
			○	くるしけに、みゆる物
			○	うらやましきもの
			○	心もとなき物
			○	こゝろにくきもの
			○	たのもしきもの
			○	たのもしけなき物
			○	大きて、よき物
			○	ちいさくて、よき物
			○	なかうて、よき物
			○	みしかくて、よき物
			○	しつかなる物
			○	さわがしき物
			○	みしりにくき物
			○	見しりよき物
			○	ゆたんせらるゝ物
			○	じひなる物
			○	むこき物
			○	わるき内にも、よき物
			○	よき内にも、わるき物
			○	せうしなる物

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（犬枕并狂哥）［未詳］	（慶長頃刊）1596〜1615	（一）	○	かん用なる物
			○	心よき物
			○	したたるき物
			○	きゝて、うれしき物
			○	めてたき物
醒睡笑［安楽庵策伝］	元和九年序1623	巻之一	序	
				謂被謂物之由来（いゝはいはるるもののゆらい）
				落書
				ふはとのる
				鈍副子（どんふす）
				無智之僧
				祝過るもいな物
		巻之二		名津希親方
				貴人之行跡
				鞚（うつとり）
				吝太郎（しはたろう）
				賢達亭（かしこだて）
		巻之三		文字知顔
				不文字
				文之品々
				自堕落

作品名[作者]	和暦(西暦)	巻	章	標題等
(醒睡笑)[安楽庵策伝]	(元和九年序)1623	(巻之三)		清僧
		巻之四		聞た批判
				いやな批判
				そてない合点
				唯有
		巻之五		妣心(だてごころ)
				上戸
				人はそだち
		巻之六		児の噂
				若道不知
				恋のみち
				恪気
				詮ない秘密
				推はちがふた
				うそつき
		巻之七		思の色を外にいふ
				いひ損はなをらぬ
				似合たのぞみ
				廃忘
				謡
				舞
		巻之八		頓作

作品名[作者]	和暦(西暦)	巻	章	標題等
(醒睡笑)[安楽庵策伝]	(元和九年序)1623	(巻之八)		平家
				かすり
				しうく
				茶の湯
				祝済た
わらいくさ[未詳]	明暦二年刊1656	上		
		下		
			刊記	明暦二丙申十一月吉日九兵衛板
百物語[未詳]	万治二年刊1659	巻之上		
			序	
		巻之下		
			刊記	于時万治二暦初夏上旬松長伊右衛門開板
かなめいし[浅井了意]	寛文三年頃刊1663	上巻	目録	
			序	
			一	地震ゆりいだしの事
			二	京中の町家損ぜし事
			三	下御霊にて子どもの死せし事
			四	室町にて女房の死せし事
			五	大仏殿修造并日用のものうろたへし事
			六	耳塚の事并五条の石橋落たる事
			七	清水の石塔并祇園の石の鳥居倒事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（かなめいし）［浅井了意］	（寛文三年頃 1663 刊）	（上巻）	八	八坂の塔修造并塔のうへにあがりし人の事
			九	方々小屋がけ　付門柱に哥を張ける事
			十	光り物とびたる事
		中巻	一	五月四日大ゆりの事
			二	伏見の城山南のかたへうつり行ける事
			三	加賀の小松の庄大水の事
			四	越前敦賀の津并江州所々崩し事
			五	朽木井葛川ゆりくづれし事
			六	地の裂たる所へ踏入し事并米俵をゆり入し事
			七	豊国はなゆのゆらずとて諸人参詣の事
		下巻	一	地しん前例并地しん子細の事
			二	諸社の神託の事
			三	妻夫いさかひして道心おこしける事
			四	なゆといふ事　付東坡詩の事
理屈物語［径山子序］	寛文七年刊 1667	巻之一	序	
			一	斉の晏子楚国へ使に行事「晏子春秋」
			二	老嫗劉道真に答ふる事「蕤啓胡語林」
			三	裳の焦たるを驚かぬ事「事文類聚」
			四	靴を銭九百にかふ事「帰田録」
			五	見もせず聞もせぬ事
			六	酒をのみて四臓になりし事「事文類聚」
			七	何事も好といふ事「後漢書」

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（理屈物語）［径山子序］	（寛文七年刊 1667）	（巻之一）	八	歌を聞て曲をしらぬ事「世説」
			九	鳥窠禪師（てうさうぜんじ）の事「五灯会元」
			十	騎馬一斤の事
			十一	楯と矛とを市にうる事「韓非子」
			十二	詹何（せんか）釣を以て王をいさむる事「列子」
			十三	片輪車の事
			十四	鈴鐸を不審する事「事文類聚」
			十五	耳大なれども富貴にならざる事「事文類聚」
			十六	石に漱ぎ流に枕する事「晋書」
			十七	石学士の事「百家詩」
			十八	青砥左衛門が事
			十九	畠飯盌飯（やうはんせいはん）の事「事文類聚」
		巻之二	一	興つきてかへる事「晋書」
			二	人間万事塞翁が馬の事「淮南子」
			三	釣をたれて魚をすつる事「事文類聚」
			四	子罕（しかん）玉をうけざる事「左伝」
			五	簪をうしなふてなく事「韓詩外伝」
			六	馬を売ざる事「世説」
			七	文字に付ての才覚の事
			八	棄宓（しんひつ）天を論ずる事「三国志蜀志」
			九	斉の貧者の事「列子」
			十	栄啓期が三楽の事「家語」

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（理屈物語）［径山子序］	（寛文七年刊）1667	（巻之二）	十一	牛午の差別の事
			十二	郄雍（げきよう）ぬす人をさす事「列子」
			十三	荘周亀をたとへにひく事「事文類聚」
			十四	陳蕃室を掃除せざる事「事文類聚」
			十五	前後問を失する事「漢書」
			十六	増賀ひじりが事
			十七	水利をこのむ事「聞見録」
			十八	楊氏をもつてたわふるゝ事
			十九	艾子（かいし）子を失ふ事「事文類聚」
			二十	魚をぬすみ夜をおかす事「晋書」
		巻之三	一	樊英順帝に屈せざる事「事文類聚」
			二	謝霊雲まがれる笠をきる事「世説新語」
			三	跨（かたあし）の履をすてざる事「賈子」
			四	佐久間一無兵法の事
			五	猟をやめて釣をする事「晋書」
			六	山河を祠りて益なき事「事文類聚」
			七	園外狼の事「凍水」
			八	雪水に茶を烹る事「事文類聚」
			九	漢の高祖狩をもつてたとへ給事「晋書」
			十	都筑兵部ぬす人をとらゆる事
			十一	千里の馬をうけざる事「漢書」
			十二	弟子辺韶を嘲る事「後漢書」

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（理屈物語）［径山子序］	（寛文七年刊）1667	（巻之三）	十三	ぬす人の食をうけざる事「列子」
			十四	命は天にある事「漢書」
			十五	河上翁王臣とならざる事「神仙伝」
			十六	廉頗藺相如か事「史記」
		巻之四	一	子を失てうれへさる事「列子」
			二	朱雀院御綸言の事
			三	樗櫟は役にたゝぬ木なる事「荘子」
			四	阮咸犢鼻褌をさらす事「晋書」
			五	蛇を画て足をそゆる事「史記」
			六	雞（にわとり）をぬすめるを諫る事「事文類聚」
			七	被裘公（ひきうこう）遊たる金を拾さる事
			八	狙公狙をやしなふ事「荘子」
			九	銅くさき三公の事「後漢書」
			十	三たひ所作をかゆる事「郁離子」
			十一	法師にならんとて芸を習ふ事
			十二	馬援梁松を拝せざる事「事文類聚」
			十三	宴子（あんし）景公をわらふ事「列子」
			十四	酒瓶を兄弟にする事「事文類聚」
			十五	満奮風をおそるゝ事「世説」
			十六	株をまもる事「韓非子」
		巻之五	一	白髪を論ずる事「世説」

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（理屈物語）［径山子序］	（寛文七年刊 1667）	（巻之五）	二	支伯位をうけざる事「事文類聚」
			三	劉伯倫酒をこのむ事「晋書」
			四	天の堕るを案ずる事「列子」
			五	愚なる人を旅の道づれにする事
			六	伍子胥衣をからげて諫る事「呉越春秋」
			七	からくり人形を穆王へ献ずる事「列子」
			八	衛の君貧窮をにぎわし給ふ事「事文類聚」
			九	荘子つりたる魚をすつる事「淮南子」
			十	年よりて智なきはむく犬におとる事
			十一	孺子呉王を諫る事「説苑」
			十二	伯夷叔斉兄弟の事「史記」
		巻之六	一	荘子魚のたのしみをしる事「荘子」
			二	狗のばけたるをあやしまぬ事「風俗通」
			三	狐死たるまねして殺さるゝ事
			四	斉の景公夢を占ふ事「晏子春秋」
			五	斉の閔王の后頸に宿瘤有事「古列女伝」
			六	日なたを君に献ずる事「列子」
			七	餅をくわんとて無言をする事
			八	原穀祖父を山へすつる事「太平御覧」
			九	介子推綿上山にて焼死する事「左伝并史記」
			十	剣を水中へおとす事「呂氏春秋」
			十一	桐葉をもつて弟を封する事「事文類聚」

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（理屈物語）［径山子序］	（寛文七年刊 1667）	（巻之六）	刊記	寛文丁未七歳桃浪哉生明洛陽書林山本五兵衛梓行
一休はなし［未詳］	寛文八年刊 1668	巻之一	目録	
			序	
			一	一休和尚いとけなき時旦那とたはむれ問答の事
			二	同師の坊につかへて鯉をくひ給ふ事
			三	一休といふ名の事　付四休居士の事
			四	蜷川新右衛門親当初て一休にあふ事付哥少々
			五	一休ならの薪にて百性の訴状を書給ふ事
			六	同関の地蔵くやうし給ふ事
			七	同閑居し給ふを人々不審する事
			八	同詩哥を作りて蛸をくひ給ふ事　付吐きやくの事
			九	一休魚をくひて高札を立給ふ事
		巻之二	一	一休和尚難句を付給ふ事
			二	同土佐守が掛絵に讃をかき給ふ事
			三	同五百らかんの名をこたへ給ふ事
			四	同元三のあしたしやれ頭を引てとをり給ふ事
			五	同大名に引導をわたす事
			六	同宗々より祖師の讃を頼む事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休はなし）［未詳］	（寛文八年刊）（1668）	（巻之二）	七	山伏一休ときどくをあらそふ事　付犬のほゆるをいのる事
			八	女の死がいをかも川へながす事　付仏果を得る事
			九	山姥のうたひ作りてゐいざんに上り給ふ事　付山法師一休に掛字をかゝする事
			十	盛照女の絵にさんをかき給ふ事
			十一	かはらけ売を追はぎし給ふ事　付布施をとりてゐんだうをわたす事
			十二	酒にゑひふして狂哥をよみ給ふ事　付唐僧に答話の事
			十三	蜷川新右衛門話則をゆるさるゝ事
		巻之三	一	蜷川新右衛門末期に化生を射事　付一休導師の事
			二	新右衛門が女房の事
			三	一休の弟子四十からにゐんだう渡す事
			四	一休遊山の事
			五	同口痺のくすりをならひ給ふ事
			六	かたゝのせんどう死する事　付引導の事
			七	沙門ゐざうを書く一休に見する事
			八	一休なぞをときて人にたづねあふ事　付斎旦那難問をかくる事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休はなし）［未詳］	（寛文八年刊）（1668）	（巻之三）	九	蝸牛のつのゝ物語の事　付南極物がたりの事
			十	一休こうじきとなり旦那をたばかり給ふ事
		巻之四	一	一休和尚の神変を語りつたふる事
			二	愚痴なる者話則をこふ事
			三	一休魚を釣給ふ事　付達磨の由来
			四	一休高野山に登り山形の詩を作り給ふ事
			五	同熊野にて山形の詩を作り給ふ事　付東坡径山寺の詩の事
			六	一休旦那の女房に懸想し給ふ事
			七	堺にてふくとうにゐひて死したる者の事　付ゐんだうを書て遣し給ふ事
			八	大内燈籠詩の事　付性霊うたの事
			九	一休御袋〈御すゝめの事　付哥少々
			十	新右衛門仏法物語の事　附扇に五戒有事
			十一	一休狗子仏性の話の事　付哥少々
			十二	風雨の日新右衛門見舞に行事
			十三	一休末期時世の事
			十四	同自画自讃の事　付末代遺言の事
			十五	一休和尚風骨の事　付狂詩二十首
			刊記	寛文八戊申暦六月吉辰書林堂山本重郎兵衛梓刊

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
私可多咄	寛文十一年刊（1671）	巻之一	序	

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（私可多咄）［中川喜雲］	（寛文十一年刊）1671	巻之二		
		巻之三		
		巻之四		
		巻之五		
			刊記	寛文十一年辛亥孟春吉旦大伝馬三丁目うろこかたや板
一休関東咄［未詳］	寛文十二年刊1672	上巻	目録	
			序	
			一	八はしにてきやうかの事
			二	みねのやくしへきやうかをつかはさるゝ事
			三	一休衆道ぐるいの事
			四	けいせいにいんどうわたさるゝ事　付にないぢや屋にいんどうの事
			五	かいの国にてちごくこくらくのもんだうの事
			六	らうにん御ひきたての事
			七	大しよくばなしの事
			八	ばけもの御たいじの事
			九	まめのしうくの事
			十	かしまにて天ぐともんだうの事
			十一	こくしへ下おびをつかはさるゝ事
			十二	ひやうたんのさかことばの事
			十三	ひるい山にて御付句の事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休関東咄）［未詳］	（寛文十二年刊）1672	中巻	一	一休こちをめして師の坊に見せ給ふ事
			二	小利大そんの事
			三	一休に御ないはう有し事　付御ししやうの事
			四	かみなりをちたる事
			五	いなかへちまのかわをつかわさるゝ事
			六	ちやうすをかりにつかはさるゝ事
			七	へいぐわいの事
			八	ちくるんの事
			九	しゆせきの事
			十	ひまはしの事
			十一	ついには日月のあはれみをかうむらずの事
		下巻	一	文字せんさくの事
			二	たきゞの寺にて金のばけたる事
			三	天をかさにきたまふ事
			四	弟子をとりてめいくをのたまふ事
			五	今出川口にてこつじきに小袖をとらせらるゝ事
			六	一休おさなき時いんどうなさるゝ事
			七	堺の浦にて遊女と哥もんどうの事
			八	甲斐の国にてかるロもんどうの事
			九	せきはんの当話の事
			十	極楽沙汰の事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休関東咄）［未詳］	（寛文十二年刊 1672）	（下巻）	十一	一休山居し給ふ時にごり酒の問答の事
			十二	壁の恋といふ題にて詩歌を詠し給ふ事
			十三	一休関東（下向の時路次にて山伏と問答の事
			十四	狂詩
			刊記	寛文十二年歳次壬子季春吉辰二条通丁子屋町鶴屋喜右衛門梓板
狂歌咄［浅井了意］	寛文十二年刊 1672	巻第一	（目録なし）	
			序	瓢水子松雲処子叙述
		巻第二		
		巻第三		
		巻第四		
		巻第五		
			刊記	寛文十二壬子年仲夏吉辰武藤氏書書林鈴木権右衛門板
竹斎はなし［未詳］	寛文十二年刊 1672	巻之上	目録	
			序	
		上巻	一	竹斎夜食の事
			二	竹斎念仏の事
			三	同うらおもてせんきの事
			四	同からかさと棒と取ちかゆる事
			五	同鼠をとらんとて猫をとる事
			六	同下女と行違事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（竹斎はなし）［未詳］	（寛文十二年刊 1672）	（上巻）	七	同小判をもらはるゝ事
			八	同きせりに火ふき竹をする事
			九	同たばこの事
			十	同勧進能見物の事
			十一	竹斎むかし物語の事
			十二	同滑水惣右衛門所をおしゆる事
			十三	同俗人の時山本亦右衛門といふ事
			十四	同火事におどろく事
			十五	同火事の事
			十六	同ぎおんまいりの事
			十七	同すりきり迷惑する事
			十八	同下かんれうじの事
			十九	同下帯落事
			廿	同ばゝに夢物語の事
			廿一	同他行しけるにいたち道をきる事
			廿二	竹斎ほたもちをほしぬすまるゝ事
			廿三	同かやつりて外にねる事
			廿四	同わたの中へはいりねる事
			廿五	同盗人に出合事
			廿六	同盗人の事
			廿七	同去方よばれ行て膳に有に物をかくす事
			廿八	同振舞に行事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（竹斎はなし）［未詳］	（寛文十二年刊）1672	（上巻）	廿九	同銭の異名を付る事
			卅	同ぜにの事
			卅一	かうじんはらひ竹斎方へ来る事
			卅二	或人来り竹斎子と嘲事并竹斎大にせく事
			卅三	竹斎棒と杖と取ちかゆる事
			卅四	竹斎をどりに出る事
			卅五	同或病人尋来るに自身留守をつかふ事
			卅六	同はじめて法躰の時の事
			卅七	同ちやうちんをとぼしれうしに行事
			卅八	同あしを引れうしに出る事
			卅九	同氷を見て餅といはるゝ事
			四十	同人参の事をしうくにいはるゝ事
		中巻	一	或人竹斎方へ行三里の灸を頼事
			二	竹斎知音かたへ茶磨をかす事
			三	竹斎れうしに出つち風にあふてかみこをとらるゝ事
			四	同腹薬にあかたるんをあたふる事
			五	同はぶきをいわるゝ事
			六	同はいがらといふ事
			七	同風車のたとへをひく事
			八	同めかけぐるひの事
			九	或人笛を守りにかくる竹斎異見する事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（竹斎はなし）［未詳］	（寛文十二年刊）1672	（中巻）	十	竹斎せうようおきかぬる事
			十一	竹斎雪隠より涙をこぼし出る事
			十二	同茶入をほむる事
			十三	同うづらをかいける事
			十四	同大坂より飯米を買事
			十五	同うらなひをする事
			十六	同薬屋にて人参を買事
			十七	同行をする事
			十八	同異名の事
			十九	同薬代に悪かねをとる事
			廿	同貧福のれうしをする事
			廿一	同午牛の事
			廿二	竹斎懐妊の女にくすりをもる事
			廿三	同やね破損の事
			廿四	同とんばうつりに行あたる事
			廿五	同貧福をあきらむる事
			廿六	同こもくゆをする事
			廿七	庄九郎竹斎をなぶる事
			廿八	竹斎大ふくりを人に見する事
			廿九	同借銀にこひ詰られ迷惑する事
			卅	同病人をきずい八百の煩といふ事
			卅一	同病人をせゝり殺事

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（竹斎はなし）［未詳］	（寛文十二年刊）1672	（中巻）	卅二	同八十余のばゝをれうしする事并七まかりと云事
			卅三	ばゝ竹斎にせんだく日を問事
			卅四	或人の子げほうかしら成事并竹斎れうしの事
			卅五	ばゝなすびを買事并竹斎さん用の事
			卅六	ぬれかみこ四十八枚と云事并竹斎よりはしまる事
			卅七	竹斎ちりくすりの事
			卅八	同神なりくすりをもる事
			卅九	同おいぬをよぶ事
			四十	わうわくもの竹斎にへをひりかくる事
			四十一	竹斎丹波越の事
			四十二	竹斎としくらべの事
		下巻	一	竹斎脉取ちかゆる事
			二	竹斎かうやくにて金をすはする事
			三	同陳皮をひく事
			四	同壺を目利する事
			五	同孫てうあいする事
			六	同もつたい付事
			七	同やつこ男腹を痛事并竹斎見立る事
			八	同とうふや施行の事并竹斎少うくる事
			九	同鯉をとびにとらるゝ事

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（竹斎はなし）［未詳］	（寛文十二年刊）1672	（下巻）	十	同人のはなしを（聞き脱カ）ながらねる事
			十一	竹斎関東下り道中にて酒を買事
			十二	同去人によばへの仕様をおしゆる事
			十三	同去方へ日待に行事并なぞの事
			十四	薬と病軍物語の事
			十五	髪（ひげ）と顔との境目論の事
			刊記	□屋喜右衛門開板
一休諸国物語［未詳］	寛文末頃刊〜1673	巻一	序	
			一	一休途中にて斎の約束の事
			二	専光寺不行義并一休落書の事
			三	一休狂哥の事
			四	同若年の事
			五	同十七歳の時途中にて引導の事
			六	松山半平難文を請和尚に返事を頼事
			七	一休関東心外寺にての事
			八	同女を見て礼拝し給ふ事
			九	同因縁ばなし并屏風に打付書の事
			十	卒都婆燃を一休やめ給ふ事
			十一	一休りんじうをすゝめ給ふ事
			十二	長野銀助一休を申入ル事
			十三	死てやけざる坊主の事并一休四句の文を書給ふに忽やくる事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休諸国物語）［未詳］	（寛文末頃刊）〜1673	（巻一）	十四	一休へよしや如斎文をやる返事狂哥の事
		巻二	一	一休殺生人に教化し給ふ事
			二	さるばかを一休一言にてつめ給ふ事
			三	一休過去物かたりの事
			四	同葛のうらみの助と付給ふ事
			五	同きつねばなしの事
			六	一休より能瀬小作に薬をとらせらるゝ事
			七	同高き物の品々をいひ立給ふ事
			八	同に或人参得の望をかくる事
			九	同或人見ざる聞ざるのいはれを問事
			十	一休人に異見し給ふ事
			十一	同へ愚痴の坊主うしに成て来る事
			十二	尊勝陀羅尼の功徳の事
			十三	一休関東にて猿をたすけ給ふ事
			十四	同天狗にゐんをならひ給ふ事
			十五	同ねずみばなしの事
			十六	くうかばうの事
			十七	箒やゆふしげと申ものゝ事
		巻三	一	一休夢中の事并或人死てきじに生るゝ事
			二	一休かつら河へながれ給ふ事
			三	同答話の事
			四	女夫をころす事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休諸国物語）［未詳］	（寛文末頃刊）〜1673	（巻三）	五	一休十一歳の時の事
			六	同ひがし山ゆさんの事
			七	山人男女共道人にまさりし事
			八	虵（へび）寺房主の事
			九	女犬に生れ来る事
			十	竹林坊の事
			十一	一休鳥山百姓をたすけ給ふ事
			十二	同はや物かたりの事
			十三	同若年の時師匠の飴壺をわり給ふ事
			十四	同或人に異見の事
			十五	同殺生人に証拠を見せ得道させ給ふ事
			十六	同と孫作狂哥の事
			十七	或人一休に不審を問事
			十八	虵（じや）よるよる来て娘をこひうくる事
			十九	或人犬の物を負かへす事
		巻四	一	一休未来物かたりの事
			二	虵（じや）をのみたると見て煩事
			三	一休虵（へび）を食にし給ふ事
			四	同妄霊来て問答する事
			五	ばけ物の事
			六	あめやせんなみの事
			七	一休制札を引給ふ事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（一休諸国物語）［未詳］	（寛文末頃刊）〜1673	（巻四）	八	同女妄霊に成て来る事
			九	同海津山中にて舞の事
			十	馬の物いひし事
			十一	一休天台房主とつめあひの事
			十二	或人一休に死ての事を問事
			十三	三好庄斎一休法問の事
			十四	宅斎が事
		巻五	一	一休かの〻絵に讃をし給ふ事
			二	或人我家に法度書しける事并一休そへがきし給ふ事
			三	一休遁世者と法問の事
			四	同女のなんぎをすくひ給ふ事
			五	同と博士狂句の事
			六	人は人たりといふ事
			七	或人一休に目薬をもらひとく立の事
			八	一休おどりの事
			九	中にぶらりといふ事
			十	或人一休に天道のいはれを問事
			十一	だいり女房の事并一休教化の事
			十二	一休清水詣の事
			十三	同風呂いりの事
			刊記	寺町□□板

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
ひとり笑（わらい）：（秋の夜の友）［未詳］	延宝五年刊 1677	巻一	序	
				ほうらいきう
				うしおき
				松竹のろん
				にんぎよ
				ぜにがみ
		巻二		たこといかと
				三途川のむば
				むさしあぶみ
				みこしにうだう
				へびとむかで
		巻三		びんぼう神　付米の値上
				恋のこがね
				さしもぐさ
				唐くちなしの花
				ふえ竹
		巻四		ねことねずみ
				でき斎
				石がめのぐはんだて
				すんばく
				耳かき了

作品名[作者]	和暦(西暦)	巻	章	標題等
(ひとり笑：) (ゑほうの春こま) [未詳]	(延宝五年刊)(1677)	(巻五)	一	むしくらい念仏　附めいとのたかへ念仏の事
			二	らく馬のはなし　附なか浪人狂哥
			三	すまあかし　附なか浪人名所狂哥
			四	ゑびとかにの事　附いせゑあらそひ
			五	茶と酒のろん　附ちやのいとく酒のいとく
杉楊枝(すぎようじ) [野本道元]	延宝八年刊(1680)	第一	序	
				竹斎不喰貧楽
				一休竹斎初而対面
				源氏のしらはた
				越中下帯
		第二		不動のからしばり
				悪女の願立
				不老不死の妙薬
				情強法花
		第三		猿が池殺生の抜句
				秤の家を氏神とあふく
				当話にこまる山臥
				河豚汁の咒
		第四		嶋田にて竹斎手柄
				ひしほの狂哥
				一休亡者と問答
				一休餅にて絶入

作品名[作者]	和暦(西暦)	巻	章	標題等
(杉楊枝(すぎようじ)) [野本道元]	(延宝八年刊)(1680)	(第四)		淋病の養性
		第五		竹斎仲人口
				鼻の下の療治
				木乃伊の切売
		第六		竹斎よまひ言
				竹斎夢想　付臨終の辞世
				太極捨欲の図
				枕屏風の歌
			跋	
			刊記	延宝八年孟春日江戸通新両替町三丁目林文蔵板行
囃(はやし)物語 [未詳]	延宝八年刊(1680)	上	序	
			一	天下一目医者の咄し并華佗物語
			二	籠抜の咄し并列子物語
			三	大風に逢し舟の咄并人のせい長短物語
			四	香瞑(かうきく)名人の咄并小野小町物語
			五	提重の咄し并仙郷物語
			六	能太夫咄し并土佐日記物語
			七	烏物いひし咄并公冶長物語
			八	念仏数取咄し并重怡物語
			九	泰山府君祭咄并有国物語
			十	防風買し咄并伯楽物語

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（囃物語）［未詳］	（延宝八年刊）（1680）	中	一	鰻（うなぎ）かば焼の咄并中納言子安貝物語
			二	身代の咄し并感世物語
			三	法華宗往生咄し并義孝物語
			四	うしなひの咄し并晴明物語
			五	比丘尼咄し并女新左衛門物語
			六	推と違ふた咄し并艾子物語
			七	大上戸咄し并国輔物語
			八	鯉の目の咄し并安勝物語
			九	銭をひろはぬ咄し并道鏡物語
			十	子共に世を渡す咄并伯夷叔斉物語
		下	一	琥珀の咄し并大海増減なき物語
			二	盗人の話し并安養尼物語
			三	悋気はなし并趙飛燕昭義物かたり
			四	北野へ無実祈る咄并直幹物語
			五	杣怪我の咄し并大樹仙人物語
			六	浄瑠璃語咄し并杯中蛇影物語
			七	絵像阿弥陀咄并地蔵物かたり
			八	坊主到惑の咄并乙鶴丸物語
			九	虎平咄し并無理之介物語
			十	道心者臨終咄并善和臨終物語
			刊記	延宝八庚申年中秋上旬幸左集之祇園縄手大黒町満足屋清兵衛板行

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
好色一代男［井原西鶴］	天和二年刊（1682）	巻一	七歳	けした所が恋のはじめ：こしもとに心ある事
			八歳	はづかしながら文言葉：おもひは山崎の事
			九歳	人には見せぬところ：ぎやうずいよりぬれの事
			十歳	袖の時雨はかゝるが幸：はや念者ぐるひの事
			十一歳	たづねてきくほどちぎり：伏見しもくまちの事
			十二歳	ぼんのうの垢かき：兵庫風呂屋者の事
			十三歳	わかれは当座はらひ：八坂茶屋者の事
		巻二	十四歳	はにふの寝道具：仁王堂飛子宿の事
			十五歳	髪きりても捨られぬ世：後家なびける事
			十六歳	女はおもはくの外：京川原町の事
			十七歳	昏紙うるし判：奈良木辻町の事
			十八歳	旅のできごゝろ：道中人どめ女の事
			十九歳	出家にならねばならず：江戸香具売の事
			二十歳	うら屋もすみ所：大坂上町者の事
		巻三	二十一歳	恋のすてがね：京手かけ者の事
			二十二歳	袖の海の肴売：下のせき遊女の事
			二十三歳	是非もらひぎる物：うき世小路はすは女事
			二十四歳	一夜の枕物ぐるひ：大はらざこ寝の事
			二十五歳	集礼は五匁の外：越後寺泊り遊女の事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色一代男）［井原西鶴］	（天和二年刊）（1682）	（巻三）	二十六歳	木綿布子もかりの世：坂田の浜女惣嫁の身ぶりの事
			二十七歳	口舌の事ふれ：県神子かまばらひの事
		巻四	廿八歳	因果の関守：信州追分遊女の事
			廿九歳	形見の水ぐし：女郎に爪商の事
			卅歳	夢の太刀風：女の起請化出る事
			卅一歳	替った物は男傾城：江戸屋敷方女中の事
			卅二歳	昼のつりぎつね：京手だて宿おどり子の事
			卅三歳	目に三月：花見がへり御所女の事
			卅四歳	火神鳴の雲がくれ：泉州佐野加藤寺の事
		巻五	卅五歳	後には様付てよぶ：よしのはこんぼんの事
			卅六歳	ねがひの掻餅：大津柴屋町の事
			卅七歳	よくの世中に是は又：播州むろ津の事
			卅八歳	いのち捨てのひかり物：京みや川町の事
			卅九歳	一日かして何程が物ぞ
			四十歳	当流の男を見しらぬ：あきのみや嶋の事
			四十一歳	今茲ゝへ尻は出候：難波舟遊もどりに夜見世の事
		巻六	卅六歳	喰さして袖のたちばな：しまばらむかし三笠が事
			卅七歳	身は火にくばるとも：新町夕ぎりが情の事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色一代男）［井原西鶴］	（天和二年刊）（1682）	（巻六）	卅八歳	心中箱：しまばらふぢなみ執心の事
			卅九歳	寝覚の菜ごのみ：語舟がまねのならぬ事
			四十歳	ながめは初すがた：嶋原初音正月羽織の事
			四十一歳	匂ひはかづけ物：江戸吉原よし田が利発の事
			四十二歳	ぜんせい歌書羽織：野秋両夫に目見ゆる事
		巻七	四十九歳	其姿は初むかし：嶋原古の高橋事
			五十歳	末社らくあそび：今のかほる装束好の事
			五十一歳	人のしらぬわたくし銀：新町より状付る事
			五十二歳	さす盃は百二十里：江戸よし原高尾紫が事
			五十三歳	諸分の日帳：新町木の村屋和州事
			五十四歳	口そえてさか駕籠：同ふぢやあづま事
			五十五歳	新町の夕暮嶋原の曙：今の高はしがみだれかみの事
		巻八	五十六歳	らく寝の車：末社厄神参の事
			五十七歳	情のかけろく：江戸小むらさき事
			五十八歳	一盃たらいて恋里：嶋原よし崎事
			五十九歳	みやこの姿人形：長崎丸山の事
			六十歳	床のせめ道具：女護の嶋わたりの事

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
好色一代女［井原西鶴］	貞享三年刊（1686）	巻一		老女隠家：都に是沙汰の女たづねてむかし物がたりをきけば一代のいたづらさりとはうき世のしやれもの今もまだうつくしき
				舞曲遊興：清水のはつ桜に一ふしのやさしき娘いか成人のゆかりぞ親は〳〵あれをしらずや祇園町のそれ今でも自由になるもの
				国主艶妾：三十日切の手掛者にはあらずよしある人の息女もする〻をたのみにやる事さてはかりそめになるまいなるとも〳〵望次第
				淫婦美形：京のよい中をあらためたる女嶋原の大夫職の風俗よしあしのせんぎがくどいおもはく丸裸にして語るに思ひの外なる内證
		巻二		淫婦中位：自慢姿ほどもなくむくひの種天神にさがり口買置算用はあはぬむかしの男みな〳〵かはるならひぞかし
				分里数女：十五半夜それ〳〵の勤め程世におかしきはなし揚屋の別れもつぼねのさらばも名残はおしき三蔵さま
				世間寺大黒：なるれば人焼匂ひも白菊といへる伽羅にかはらず魚はくふぬれは有寺程すむによき所はなし

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色一代女）［井原西鶴］	（貞享三年刊（1686））	（巻二）		諸礼女祐筆：かへす〳〵恋しりとおもひまいらせ候かねで作りし男もいつとなくおとろへて人ころしさまいる
		巻三		町人腰元：養生しらずの命一代持男を気の短かき女有
				妖孽寛闊女：表使の女役をせし時おした屋敷の恪気講さても〳〵をそろしや御前さまの皃つき今にわすれがたし
				諷戯哥船：大坂川口の浮れ比丘尼ひよくのさし鯖にかゆる浪枕もおかしき有さま此津に
				金紙匕髻結：面影は髪かしらなるにつれなや猫にそばへられてかくせし事のあらはるゝもよしなや御梳あげの女の時悪心
		巻四		身替長枕：それ〳〵に母親の自慢娘娌入は一年の花詠めあく物ぞかし替添女をして是を見およぶ
				墨絵浮気袖：お物師女となりて針の道すぢよりおもひのほころぶる程我宿の思ひ出にぬれごろも
				屋敷琢渋皮：水のさしてもなき茶の間女殿めづらしき家父入姿黄無垢はむかしを残して是ひとつ

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色一代女）［井原西鶴］	（貞享三年刊）（1686）	（巻四）		栄耀願男：恋の中居女をして堺にありし時御隠居のかみさまになぶりものとなりぬ世にはおかしき事こそあれ沙汰なし
		巻五		石垣恋崩：京といふ気色爰なるべし大鶴屋海老屋山屋姫路屋くるみや二階の色引てさはぎ踊此々やつこの〳〵此女
				小哥伝授女：にしの板付にきいたお声ざつと一風呂うきなのたゝぬうちにぬれて見ておかしきもの一夜切におもひも残らぬ〳〵
				美扇恋風：商口のすあひ女みだれかゝる糸屋ものあふぎやはうらおもてある心かくし絵を男も合点
				濡問屋硯：中宿の楽寝はすは女はしらぬ身のうへまぎれものは異名つけてよぶ
		巻六		暗女昼化物：上町は藤の花に行女お敵次第にもつてまいる色姿衣類もそのまゝ替つた事の
				旅泊人詐：小遣帳にも付られぬ中間算用三五の十八ふり袖に留られて馬じや〳〵春はござれの
				夜発附声：しのびぢにはあらねど犬にとがめられて割竹の音夜は八つ声して君が寝巻七蔵合点か

作品名[作者]	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色一代女）［井原西鶴］	（貞享三年刊）（1686）	（巻六）		皆思謂五百羅漢：むかしにかゝる都の浄土死兒を又今見るやうにそれよこれよ諸袖にぬれのおはりを語る
好色五人女［井原西鶴］	貞享三年刊（1686）	巻一		姿姫路清十郎物語
			一	恋は闇夜を昼の国：室津にかくれなき男有
			二	くけ帯よりあらはるゝ文：姫路に都まさりの女有
			三	太鼓に寄窮子舞：はや業は小袖幕の中に有
			四	状箱は宿に置て来た男：心当の世帯大きに違ひ有
			五	命のうちの七百両のかね：世にはやり哥聞ば哀有
		巻二		情を入し樽屋物がたり
			一	恋に泣輪の井戸替：あい釣瓶もおもひに乱るゝ縄有
			二	踊はくづれ桶夜更て化物：人はおそろしや蓋して見せぬ心有
			三	京の水ももらさぬ中忍て合釘：目印の錐紙に書付て有
			四	こけらは胸の焼付新世帯：心正直の細工人天満に有

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色五人女）［井原西鶴］	（貞享三年刊）（1686）	（巻二）	五	木屑の杉楊枝一寸先の命：りんきに逆目をやる杉有
		巻三		中段に見る暦屋物語
			一	姿の関守：京の四条はいきた花見有
			二	してやられた枕の夢：灸すゆるよりおもひに燃有
			三	人をはめたる湖：死もせぬ形見の衣装有
			四	小判しらぬ休み茶屋：都に見し土人形有
			五	身のうへの立聞：夜の編笠子細もの有
		巻四		恋草からげし八百屋物語
			一	大節季はおもひの闇：かり着袖に二つ紋有
			二	虫出し神鳴もふんどしかきたる君様：化物おそれぬ新発意有
			三	雪の夜の情宿：恋の道しる似せ商人有
			四	世に見をさめの桜：惜やすがたのちる人有
			五	様子あつての俄坊主：前髪は又花の風より哀有
		巻五		恋の山源五兵衛物語
			一	つれ吹の笛竹息のあはれや：さつまにかくれなき当世男有
			二	もろきは命の鳥さし：床はむかしと成若衆有

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（好色五人女）［井原西鶴］	（貞享三年刊）（1686）	（巻二）	三	衆道は両の手に散花：中剃はいたづら女有
			四	情はあちらこちらのちがひ：同じ色ながらひぢりめんのふたの物有
			五	金銀も持あまつてめいわく：三百八十の鎰あづかる男有
籠耳（かごみみ）［艸田斎］	貞享四年刊（1687）	巻之一	序	
			一	遠花香：とくりの君をしのぶ眠蔵　付タリあんにちがふた御室の僧庵
			二	芸依道賢：才智おそろし山うばの脇付タリ大蔵うづらのやき鳥
			三	捨身有浮瀬：名は世になる田孫六が沙汰　付タリ　ちやうせん陣高名の楽書
			四	蒙古国裏鬼：元興寺にかましよすだくわらんべ　付タリきみが畑うぶめ物がたり
			五	穴賢無恙：ことばのはなもさく芋の茎付タリ男女ふたなりの弁
			六	神宜禰風俗：神の御くじも粟津の八幡付タリ漢の武帝はゝきぼしの論
			七	命在食：武家のごくらくしよく人の地獄　付タリ八でう敷の脾胃からにあるためし

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
籠耳（かごみみ）［艸田斎］	貞享四年刊（1687）	巻之二	一	芸扶身：石うす茶うす引ことにする芸付タリ国主の名言
			二	馬鹿慇懃：かつて甲のおもい物ずき付タリ森川なにがしが事
			三	大名大耳：さゝやき八町金蔵をたつる付タリ袋屋宗古が事
			四	無声呼人：さてもそのゝち奉加帳の序付タリ慈鎮和尚ゑちご太夫が事
			五	不立矢声：たびは道づれ世はぬす人付タリ尾州しば田宮内が事
			六	怪我高名：料理ばなしはくさつても鯛付タリ雪舟すみながしの龍虎の事
			七	急則廻：はや牛おそ牛つきにけり淀付タリ連哥師宗長が哥
		巻之三	一	万事気前：むかしのつるぎ今の奈良物付タリ北条氏政きつねの哥
			二	貧乏閻：神はあがらせ給ふ幣閻　付タリひたちの国主慈悲のさばき
			三	借傍屋取表屋：大よくは無よくの徳政　付タリゑちごのくにのとや長兵衛が事
			四	十分覆：はげしかれとはいのる雨ごひ付タリ李衛公ごきやうのわたくし

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
籠耳（かごみみ）［艸田斎］	貞享四年刊（1687）	（巻之三）	五	鵤生鷹：はむるはそしる世のことば草付タリ漢の高祖のかほ
			六	狗子知路：ためしすくなき四つ足の飛脚　付タリかた野三楽寺が智謀
			七	能交為牆：ちかいとなりに遠いぬす人付タリ江州へそ村さいめ論
			八	肩吉凶：田舎間京間六尺三寸　付タリ南都木津屋藤次郎が説
		巻之四	一	採御髻塵：さたはない事和のひげ人参付タリ板氏殿公事のあいさつ
			二	地獄沙汰銭：くま野びくにのくまで性はなし　付タリ丹波与三兵衛めいど物かたり
			三	阿弥堕銭光：ひかりわたつた唐の仏像付タリけいせいぐるいのいけん
			四	傍若無人：しらみをひねる王猛が口上付タリあふみのくにゝ弁けいが刀有
			五	鋸肩謂被謂：けあげのどろもかわくまりの場　付タリ普阿み長斎当座のかるロ
			六	自姓育：唐のやどがへいわふて三度付タリぎやうぶ左衛門一乱の洗足
			七	答話即妙：じゆずの数弓極楽によつ引てはなつ　付タリひでいち音下のりくつ

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（籠耳）［艸田斎］	（貞享四年刊）（1687）	（巻之四）	八	下手長談義：高座の天秤十貫匁をたゝきだす　付タリをしやうのかんるいいたづら男
			九	大欲無欲：かたいかね七百両石のかねばこ　付タリ浪人まさむねの刀をおるわけ
		巻之五	一	悪子出世：あと式うけ取済勘当帳　并ニむほんのくじさた
			二	錐脱嚢：加勢たらねば千騎に一騎　并ニ毛遂が才智
			三	腎食観音：いきらいかうはあす午の刻　并ニ馬頭蔵人が出家
			四	作仏不入眼：信心さめぬ孫六が夢　并ニ帝尺天のちぞう会
			五	乞食無種：刀の目くぎぬけめのない目利　并ニ和漢かたきうちものがたり
			六	有鰥言：魚もひれあるさふらひにたがふ　并ニびぜんのくに浮田なを家の料理
			七	身内財無腐：類火のけふりうつるやき筆　并ニよしひでがよぢり不動
			八	折檻折角：ほまれはつよい朱雲が学力　并ニ兎角兎口いわれぬ評判
			九	下戸化物無：今の世にもある宇治の橋ひめ　并ニにしくぼ山大入道がくび

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（籠耳）［艸田斎］	（貞享四年刊）（1687）	（巻之五）	十	一粒万倍：ひさこはくめどつきぬ米が淵　并ニすゞめゐんぐわ経
			刊記	貞享四丁卯年林鐘下澣書林田中庄兵衛万屋庄兵衛同梓
	貞享四年刊	巻之一	一	囀はかるロのとりべ野
新竹斎［未詳］			二	はなはちる黒谷の夢
			三	廻ぬ薬自慢酒つぼのかめ山
			四	妙薬は磁石の推量
			五	果報は唇につくさが土器
		巻之二	一	此世に三途川姥が懐
			二	蝌（かへるこ）ふまる四季縄手
			三	嵐にゆがむ松の尾の相撲
			四	朱雀の色狂錠にかゝる玉璽
		巻之三	一	深草の馬思へば宇治川の先陣
			二	名所聞ありく茶の芳園
			三	天狗嫌のつかみて有くらまのふく
			四	京かぶきの見続旅の物いひ伽
		巻之四	一	西に京の闇日の出の東路
			二	深川の底ぬけ上戸彩の赤人形
			三	道戯の初看板大笑の口あけ
			四	虚咄の初口ひろし狼
		巻之五	一	謎禁好は斎が目に春の氷

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
（新竹斎）［未詳］	（貞享四年刊）1687	（巻之五）	二	口の広が勝秀句問答
			三	薬種の外につかひこなすからもの
			四	やまと窓は無理の逃道
			五	病の判物は富貴の下地
			刊記	貞享第四歳卯芳春吉辰日帝畿三条通油小路東江入書林西村市郎右衛門坂上庄兵衛彫刻
二休咄［未詳］	貞享五年刊1688	巻之一	序	
			凡例	
				草の庵
				さゝの花
				中山
		巻之二		恋のたね
				初しのび
				品さだめ
		巻之三		世の中
				伊予
				望月
				うら嶋
		巻之四		香久山
				水の音
				法の人

作品名［作者］	和暦（西暦）	巻	章	標題等
二休咄［未詳］	（貞享五年刊）1688	（巻之四）		なる神
				沖津
		巻之五		秋風上
				秋風下
				石山
				尾花川
			刊記	皆貞享五戊辰歳正月吉日江戸神田新革屋町西村半兵衛洛陽錦小路長田長兵衛同出水大宮山本八左衛門
			跋	